

一 般 演 題 抄 錄

## 11. 当院での ERCP 施行例における 膵管癒合不全例の検討

川端一史 汐見幹夫 松井繁長  
横山容尚 由谷逸朗 上田久美  
石井望人 松井洋勝 井上良一  
青木矩彦

近畿大学医学部第2内科学教室

膵管癒合不全は、内視鏡的逆行性膵・胆管造影(以下 ERCP) の普及及び本症の臨床的意義が注目されて以来、その報告数が増加している。今回我々は、当施設における ERCP 施行例中合計32例の膵管癒合不全症例を経験し、臨床的立場から考察を加え、報告する。

### 結 果

当施設において1974年7月より1995年5月までに3297例の ERCP を施行した。このうち膵管癒合不全と診断した症例は、32例で、その頻度は、0.97%、男女比は1:1.13であった。診断時年齢は、28歳から82歳であり、平均年齢は、56.4歳であった。

自覚症状は、腹痛が23例、71.9%と最も多く、内訳は、心窩部痛、背部痛、右季肋部痛が多かった。

膵外分泌機能については、血清アミラーゼは10例、31.3%で上昇し、PFD 試験は施行した8例全例正常であった。

膵内分泌機能については、8例、25.0%に耐糖能異常を合併していた。

合併症については、胆道結石、耐糖能異常、慢性膵炎の順で合併が多く見られた。

### 考 察

本邦では、比較的稀と考えられていた膵管癒合不

全は、ERCP の普及と本症の臨床的意義が注目されて以来、その報告は増加している。欧米では、剖検例で5~12%、ERCP 例で約3%、本邦では、ERCP 例で0.3~3.0%と報告されている。自験例では、0.97%であった。

臨床像では、本症は腹部不定愁訴、膵炎様症状の原因になることは、既に多数報告されており、自験例でも腹痛が多く経験された。

また、本症に慢性膵炎合併の有無についての定説はないが、今回5例に認め、5例全例に自覚症状として腹痛を認めた。たとえ慢性膵炎を合併していなくとも本症では腹痛をおこしうるとされているが、この機序として、主たる膵導管口である小さな副乳頭に膵液のうっ滞があり、アルコール摂取、過食、過酸などの負荷因子が加わることによる hypersecretion-obstruction theory により、膵炎様症状を発症させると考えられている。

今後、腹部不定愁訴、膵炎様症状を訴える症例に対し、常に本症を念頭におき検索する必要があり、ERCP で腹側膵管のみ観察された場合や何度試みても胆管のみしか造影されなかった場合、副乳頭からの造影を行ってみることは、膵癌の発見あるいは鑑別の意味でも極めて重要であり、積極的に行うことが必要と考えられる。